黄金の郷

こしぇるびと

つむぐストーリー vol.141

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしぇるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

一つ一つの成長を大事に

室根町折壁

小山 健司さん

父の後を継いで

穏やかな秋晴れの下、霊峰室根山を望む折壁地区の一画。小菊一本一本に目を向け、成長を確認する小山健司さんの姿がある。

健司さんは農家に生まれたものの、大学進学を機に上京。以来、農業とは無縁の生活を送っていた。転機が訪れたのは4年前。転職を考えていた矢先、父・浩さんの訃報が届いた。実家には浩さんが残した農機具も畑もある。「このまま辞めてしまうのはもったいない」。Uターンして就農することを決意した健司さんは、新規就農ワンストップ相談窓口を利用。JA研修生となり小菊農家の下で研修を積んだ。花弁（かき）を選んだ理由はもちろん、浩さんも花を育てていたから。1年の研修を終え、2025年に就農。新たな人生が始まった。

成長と課題を感じて

就農1年目を「計画の立て方が甘かった」と振り返る健司さん。機械の操作から収穫、箱詰めまで、教えてもらいながらやるのと、実際に自分一人で手を動かすのとでは大きな違いがあり、思い通りに作業が進まないことに悩まされた。それでも諦めずに試行錯誤を繰り返し、結果的に「想定より売り上げが上がったのが救いだった」と話す。

2年目となる今年は反省を生かし、より緻密に計画を立てて作業に取り組んでいる。早速改善効果が表れ、昨年よりも秀品率が上がるなど成長を実感している。一方、6月に降ひょうに見舞われ、収量が下がるという洗礼も受けた。「なかなか思うようにいかない。でも、それもまた面白い」と健司さんは前を向く。

改善を重ねて成長する

健司さんはJA花き部会小菊専門部に所属。「やる気がある生産者が多く集まり、高い団結力がある良い組織」と信頼を寄せる。ひたむきに頑張る先輩の背中は自身を奮い立たせてくれ、力を合わせて産地を守り、盛り上げようとする仲間の姿からは刺激をもらっている。

この2年で健司さんは「来年はもっと良い小菊を作れそうだ」という自信を得ることができた。反省点を生かして改善できた経験が大きい。3年目は面積を維持しつつ、単収を上げるのが目標となる。そのために今年の良かった点や改善点を洗い出して計画を練り直し、来年栽培する品種の選定に取り掛かる。真っすぐに未来を見つめる健司さんは、すでに動き始めている。



PROFILE

小山 健司さん（39）
Kenji Oyama
室根町折壁

1987年室根町折壁生まれ。東京都内で飲食関係の仕事をしていたが、父・浩さんの訃報を受け、農家として後を継ぐことを決意。新規就農ワンストップ相談窓口を利用し研修を積んだ後、2025年就農。小菊32㌃、スターチス1㌃。祖父母、母の4人暮らし。